

題目：匿名の世界は本音の世界

—多元的無知の解消に情報の匿名性が及ぼす効果の検討—

氏名：伊藤 一郎

指導教官：高橋 伸幸

多元的無知に関する研究は、Fields& Schuman (1976)以降、様々なかたちで行われてきたが、多元的無知の解消については触れられてこなかった。著者は、他の人の本心を公表すれば、他の人の考えを自分で推測する必要がなくなるため、多元的無知が解消されるのではないかと考えた。しかし、ただ意見を公表するだけでは、それが本当にその人の本心なのかを判断できない。そこで、本心であることを保証するものとして「匿名性」に注目し、公表される情報の匿名性を操作することで、公表された情報を本心だろうと皆が思う程度や、多元的無知が解消される程度に差が生じるかどうかを検討した。

本研究では10人グループで実験を行った。実験では、アイスブレイクや人気投票を行い、参加者がお互いの目を気にしてしまう状況を作った。その上で、予備調査を行って精査した、多元的無知が発生しそうなシナリオを読んで、そうした状況でどのような行動を取りたいかを参加者に選んでもらい、その後各参加者の選択を公表した上で、もう一度同じ選択を行ってもらった。本研究では、誰がどちらを選んだか分からないまま公表される匿名条件と、誰がどちらを選んだかまで分かるよう公表される実名条件、と2つの条件を設定することで、匿名性の操作を試みた。こうした操作により、匿名条件の方が他の参加者の目が気にならず、皆本心を答えるだろうと思うだろう、そして、1度目の選択で周囲の目を気にして本心ではない回答をした人が、2度目では本心で回答するようになるだろう、すなわち、より多元的無知が解消されるだろうと予測された。

実験の結果、公表された情報を本心だと思える程度に関しては、人とのつながりよりも自由を重視する傾向が高い男性においてのみ、予測と一致する結果が得られたが、それ以外には予測と一致する結果は得られなかった。一方条件差以外に注目すると、心理傾向が大きく影響していた。このことから、公表された情報を本心だろうと思える程度には、周囲の状況よりも個人の心理傾向が大きく関係していることが明らかになった。また、多元的無知が解消された程度の条件差を比較するため、1度目の選択と2度目の選択で行動を変えた参加者の数を調べたところ、128人中5人しかいなかった。これは、参加者が周囲の目をほぼ気にしていなかったためであると考えられ、今後はより周囲の目が気になるような状況を作って、実験を行う必要があるといえる。